

序

理学療法士にとって運動療法は、業務の中核をなす治療技術であり、中でも運動器に対する技術は、その基本となる。このため、理学療法の卒前教育において、長時間に及ぶ講義と実習が行われているが、これまでの教科書は、運動療法の理論やその背景を重視したものが多かった。基礎的な知識の重要性に疑いの余地はないが、運動療法をはじめとする理学療法の評価や治療は「知っている」から「できる」となっただけで完結する。しかし、教育現場のみならず臨床現場においても、痛切にその隔たりを感じることもある。そこで、本書では、基本的な運動療法を理解するだけでなく、「できる」まで引き上げることに注力した。以下に本書の特徴を示す。

- ①運動療法の評価や治療の具体的な方法を示し、学内教育においてこれを体験し、反復して習得する実習課題を提示した。中でも運動器の操作技術を向上させるため、骨格模型を用いた実習課題を章ごとにとり入れた。
- ②運動器に対する治療と評価には共通する手技があり、さらに臨床では、正確性とともによりバリエーションも求められる。このため本書は、総論も要点を整理して図式化し、各論を含めてできる限り多くの図表を用い、視覚的な理解を重視する図説とした。
- ③各論は身体各部の普遍的な評価や治療技術を習得するため、疾患別ではなく運動器を部位別に対象とする構成とした。
- ④部位別の表記とともに、理学療法士にとって重要な、全身の姿勢や運動の連鎖に関する章を設けて詳述した。
- ⑤それぞれの章に実際の症例を交えた解説や図をとり入れ、実践的な内容となるように配慮した。
- ⑥理学療法士や理学療法を学ぶ学生にとって、正しい知識とともに、生体の現象を「捉える目」と「感じる手」は、欠くことができない。近年、解像度や機能が飛躍的に向上している超音波診断装置（エコー）は、皮下における骨や軟部組織の動態を可視化できる。今後ますます臨床や教育においてその重要性が増すと思われ、本書でも積極的にとり入れた。

本書の執筆は養成校の教員の他に、臨床で活動している理学療法士の方々にもお願いした。単に作業を分担するのではなく、教員と臨床家が運動器の運動療法における評価と治療、その教育について真摯に検討を重ね、その成果を本書にまとめることができた。本書の刊行は、学校教育と臨床現場において、卒前および卒後の教育を共有することにも役立つと思われる。

最後に、本書の出版にあたり大変お世話になった、羊土社の原田悠氏と冨塚達也氏に、深甚なる謝意をあらわす。

2017年7月

編者記す